

研究計画書

ゼミ名	市野ゼミⅡ	チーム名	いちのみや×きんじろうず
タイトル	非認知能力の育成		
テーマ群	g) その他		
メンバー			
研究計画内容	<p>近年、非認知能力に注目が集められている。ジェームズ・J・ヘックマンをはじめとした先行研究では、非認知能力が高い人ほど学力が高く、それを通して所得が高い傾向にあるということが示されている。この非認知能力は性格や個性などであり、テストなどで測定が可能な認知能力とは異なる。その代表例として、5つの因子に分けて説明したビッグファイブというものがある。その5つの因子とは「外向性」「協調性」「勤勉性」「情緒安定性」「経験の開放性」である。先行研究の1つである、Lee and Ohtake(2014)によれば、非認知能力の5因子で所得と最も相関が高いのは外向性であり、次に相関が高いのが勤勉性である。続いて、経験の開放性、協調性、情緒安定性の順で相関が高い。本研究ではこの非認知能力の育成時期や育成方法について考え、政策を提言する。</p> <p>最初に非認知能力と所得との相関を確認するため、Lee and Ohtake(2014)で使用された、大阪大学「くらしの好みと満足度のアンケート」(2010)(2012)のデータを使い、所得を非認知能力で回帰する。加えて本研究ではLee and Ohtake(2014)では行われていない分析も行う。例えばLee and Ohtake(2014)ではビッグファイブの勤勉性を「しっかりしていて自分に厳しいと思う」と、その逆転である「だらしなく、うっかりしていると思う」という質問だけで測っている。しかし、村上(2017)によると、勤勉性を「どちらかというと徹底的にやる方です」や「筋道を立てて物事を考える方です」、「仕事や勉強には精力的に取り組みます」などの複数の質問で測っている。また「節約的」や「良心的」などといった勤勉性に関係する形容詞もある。これらの勤勉性に関係する質問項目や形容詞を使い、大阪大学(2010)(2012)のデータで勤勉性が問われていると考えられる質問を抜き出し、説明変数に加える。他の因子についても同様に行う。そのような分析を行うことで、私たちは、各因子の構成要素のうちの何が所得に影響を与えているのかを知ることができ、その分析結果にもとづいて、非認知能力を高めるための具体的な教育方法を提案することができる。</p> <p>参考文献 Lee and Ohtake “The Effects of Personality Traits and Behavioral Characteristics on Schooling, Earnings, and Career Promotion”, RIETI Discussion Paper Series 14-E-023, (2014) 村上宣寛・村上千恵子、筑摩書房『主要5因子性格検査ハンドブック』(2017)</p>		